坂本恒夫(明治大学教授)
境　睦(桜美林大学経済･経営学系教授)
林　幸治(大阪商業大学総合経営学部准教授)
鳥居陽介(諏訪東京理科大学専任講師) 編著

中小企業のアジア展開

中央経済社　2016.7.　7.11. 282p.

本書は，日本中小企業・ベンチャービジネスコンソーシアム設立15周年を記念して出版されたものである。全体は三部構成になっており，第Ⅰ部「なぜ日本企業はアジアに展開するのか」では，日本企業優位という考えを改める必要性（1章），アジア諸国との共生と相互作用（2章），日本企業の中国への進出の再考（3章），大手邦銀のアジアにおける展開の可能性(4章)，アジアにおけるソーシャルビジネスの社会貢献(5章)を取り上げている。第Ⅱ部「中小企業のアジア展開」では，なぜ中小企業がアジアに展開するのかについて，起業家精神（6章），市場開拓（7章），展開要因（8章），事業再編（9章），金融機関による支援（10章），バイアウト（11章），そして地方の中小企業の海外展開（12章）といった視点から論じている。第Ⅲ部「アジアの経営環境」では，欧米系製薬会社のアジア展開(13章), TPPと農業(14章), 中国・ハイアールのモジュール化（15章），マレーシアのIPOの現状（16章）といった視点で論じており, これに税理士法人の海外展開(補章1), 失敗から学ぶベトナムビジネス（補章2）が加わっている。

執筆者は18名で，その立場も研究者のみならず，実務家，そして大学院生まで含まれており，なおかつ執筆者の専門分野（業種，企業規模，国・地域など）が広範な領域にわたっている。その結果，上記のように各部・章のテーマも様々であり，また執筆形式も論文形式（うち査読論文が5本）から調査報告や解説まで，章によって様々である。編者の一人も指摘するように，そのテーマ・分野や形式において「全体としてのまとまりには欠けた部分があることは否めない」内容になっている。特に，本書タイトルに「中小企業」という研究分野を限定するキーワードがつきながら，中小企業をテーマとして取り上げた章はほぼ第Ⅱ部に限定されている。つまり，より多くの分量を占める残りの二部（第Ⅰ部，第Ⅲ部）はおよそ中小企業とはかかわりのないテーマで書かれており，このタイトルとの不一致は，読者に誤解や失望を与えるものであることをまず指摘しておきたい。

したがって，本書のテーマ・分野の広がりから内容を総括するのは難しく，ここでは「中小企業」について書かれ，また査読形式がとられた論文5本のうち4本が含まれる第Ⅱ部の7・8・10・11章を取り上げたい。

まず「第7章　新興国の市場開拓と中小企業の経営課題」（境　睦）では，新興国市場開発を実施する際に，本国とのあいだに資源の非連続性が存在し，資源を再構成する場合には高いコストが発生する。これは経営資源が乏しい中小企業にとって大きな障壁となるが，海外で拡大する日系外食企業の事例を通じて，これをどのように克服したのかを「ネットワーク」という概念を用いて明らかにしている。検証結果によれば，日本本社と現地との関係において，むすびつきの強・弱を交えたハイブリッド型のネットワークを構築することが有効であること，具体的には信頼あるパートナーとの強い結合のネットワークを軸としながら，新興国株式市場での上場によりファイナンスという直接的効果

のみならず，副次的効果（知名度の向上，有能な人材の獲得）を得て，それを通じて経営資源を獲得し，急速にネットワークを拡大させることが効果的であると指摘する。事例を通じての検証のため，この主張には説得力があるが，著者が指摘するように1社のみの事例を対象にしていること，さらにこの事例が飲食業であることに主張の限定性も感じる。なぜなら，本事例でもそうだが，飲食業（サービス業）の場合，フランチャイズという手法による（緩い）ネットワークの拡大が比較的たやすく，これが（中小）製造業の場合でも適用できるのかに疑問が残るからである。

「第8章　歴史から見た中小企業の海外進出」（林　幸治）では『中小企業白書』や『商工金融』などの中小企業関連の既存資料をひも解きながら，1960年代から2010年代の現代まで，各年代にみる中小企業の海外進出の目的，進出先，そして課題の変遷を検証している。地道な作業ではあるが，近年，拡大する中小企業の海外進出を歴史のなかで捉える有意義かつ貴重な取り組みとして評価できる。検証結果によれば，進出先が移行しているとはいえ「低廉な労働力」と「市場」を求めて進出する目的は過去も現在も変わらず，その課題も，進出先と日本の違いからくる文化や習慣などによるもので，これも不変としている。著者も認めるように，ここでは前記資料による二次的データを使用しているため，分析に限界はあるが，その不変とする課題を克服する企業も存在しているはずである。どの年代にも同様の課題を抱える企業がみられるのは当然としても，そうした企業の割合が増えているのか，減っているのか，また課題を克服する企業とそうでない企業の違いは何かを分析することが，歴史的視点でみるうえで重要ではないだろうか。

「第10章　中小企業のアジアへの進出と地域金融機関の役割」（上野雄史）では，中小企業の海外進出に果たすリレーションシップ・バンキング（以下，RBとする）の意義と課題について述べている。中小企業の海外進出において，その経営資源の不足が課題として指摘されるが，地域金融機関についても同様の問題を抱えている。その点について，ここでは地域金融機関のもつRB機能の有用性を主張している。具体的には金融機関での連携，それを通じたサポート体制の必要性など説いている。ここではRBにかかる先行研究，事例の紹介などの整理，それをもとにした著者の主張が展開されるなど提案としては秀逸かもしれないが，査読「研究論文」としての「新たな知見」の提示が欲しい。

「第11章　中堅・中小企業のアジア展開におけるバイアウト・ファンドの活用」（杉浦慶一）では，バイアウト・ファンドの仕組みについて概説し，日本で活動するバイアウト・ファンドにより日本企業のアジア展開の支援が実施された事例を紹介，その成果を踏まえて，独力で海外展開の強化を目指す経営資源の乏しい中堅・中小企業の場合には，バイアウト・ファンドの活用は有力な手段になりうることを主張している。著者によれば，そもそも，中堅･中小企業，アジア展開，バイアウト・ファンドでの先行研究がみられないとしている。したがって本論の意義や有用性も高まるわけだが，前記の解説に力点が置かれ，第10章と同様に「新たな知見」がみられないのが残念である。むしろ章末に記された今後の研究課題こそが，同分野の重要な研究テーマとして考えられ，今後の成果に期待したい。

以上，中小企業にかかる査読論文を中心に書

評を展開した。ここには第７章などユニークな論文もみられるものの，コンソーシアム記念出版としての位置づけ，その限界性もあって「論文集」や「研究書」としてよりも「解説書」としての色合いが強い。本書全体として，そうした印象をもった。

（松本大学総合経営学部教授　兼村智也）